

# 今やらねば

田中館愛橋の生涯

②



## 【少年編】

### 命懸けで勉学に励む

田中館愛橋が誕生したのは1856（安政3）年9月18日、日本がまだ武士の時代、ペリー来航から3年後の頃である。

田中館家は盛岡南部藩で代々兵法師範を勤めていた。曾祖母はのちに「南部の赤穂浪士」で知られる檜山騷動の相馬大作（下斗米秀之進）の実姉、曾祖父は大作「実用流」の後継者という筋金入りの武家である。祖父が早世したため家系を絶やさぬようにと父稲蔵は17歳で、16歳の小保内キセと結婚している。

翌年長男愛橋が誕生した。5歳になると母から文字を習う。6歳の時に母が病死。泣いていると、父稲蔵に「侍

の子は母が死んだくらいで泣くな」と厳しく叱られたが、どうしても涙が止まらず、奥部屋で声を殺して泣いた。後に田中館は「一生の出来事の中で、母の死が一番悲しかった」と語っている。

9歳で血判自署し実用流に入門。師範の下斗米軍七に厳しく武芸を仕込まれた。晩年、田中館は「今で言うスパルタ式の教え方であったが、何度も繰り返すうちに少しずつ身に付いていった。水おけを運んでいると突然背中を

押されて転んだ。すると『何のための修行か。直ぐ振り返って切り返せ』と叱られる、まったく実用流の教え方だった」と残している。

同じころに南部藩学校令斉場で文武を学び、会舗社私学校でも学んだ。「父や叔父が木刀で稽古すると二百でも三百でもひゅうひゅうと素振りが出た。自分もそうなりたいと思うのだが、五十回くらいでふらふらになり悔しかった」と自身が負けん気の強い子どもだったと回想している。

田中館が12歳の頃に明治維新が起こり、侍の世が終わる。盛岡南部藩は賊軍とさげすまれ、藩主は白石に移される。侍の多くは失職し、世の中の価値観が一変する。「これからは学問の時代だ」と言う父稲蔵に従って、田中館は命懸けで勉学に励むことになる。

1869（明治2）年、13歳で盛岡に出て経書を学び、その後盛岡藩修文所に入學。同期に原敬（後の総理大臣）、佐藤昌介（後の北海道大学総長）が、後輩には新渡戸稲造がいた。明治5年に帰農していた父稲蔵は、子どもの教



田中館愛橋が「実用流」を学んだ会舗社の教場「槻陰舎」（呑香稲荷神社内）＝福岡字五日町

## 泣く泣く断髪

【ミニコラム】

### 武士の魂

13歳の田中館愛橋は、父の勧めで盛岡に出て勉強に励んだ。明治維新の後もしばらくはちょんまげを結っていたが、1871（明治4）年のある朝、勉強仲間たちに寝込みを襲われ、「時代遅れ」とちょんまげを切られてしまう。

必死の抵抗で半分残し、いつまでも残りのまげを付けていたら、那珂通世（岩手県出身で後の歴史学者、東京女子師範学校校長）に諭され、泣く泣く断髪したという。

育のために全財産を売り払い、一家で東京に移住する。

田中館が上京した頃、上野の山ではまだ彰義隊が戦をしていたという。明日の日本が見えない時代に何をどう勉強していけばいいのか。田中館の命懸けの戦いが始まる。

（中村誠＝田中館愛橋会事務局長）